

経済マンスリー

[原油]

原油価格は供給懸念の後退を受けてやや軟化

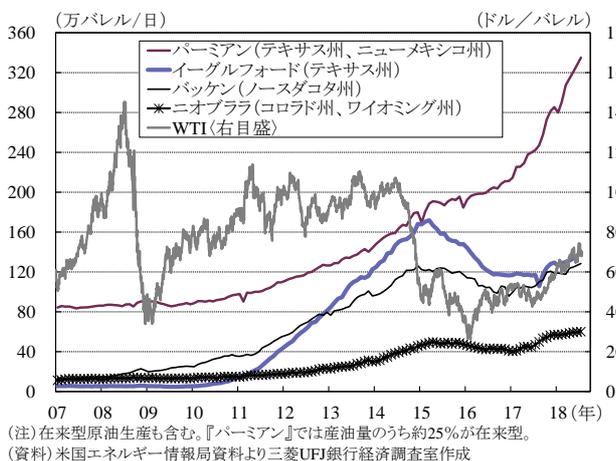
原油価格（WTI 期近物）は、6 月の OPEC 総会における減産緩和の合意内容が曖昧であったことや、米 국무省高官がメディアに対し、イラン産原油の輸入国に 11 月 4 日までに輸入を停止するよう求める主旨の発言をしたこと等から上昇し、7 月 3 日に一時 75 ドル台と 3 年 7 ヶ月ぶりの高値を付けたが、足元では 70 ドルを割って推移している（第 1 図）。

足元の原油価格の軟化は、先行きの原油供給に対する懸念がやや後退したことを反映している。まず、米国が 11 月に再発動を予定しているイラン制裁に関して、ポンペオ米 국무長官が、イラン産原油の輸入国に課す制裁に例外措置を検討する考えを示した。リビアでは、6 月 14 日に武装勢力の攻撃を受けて一時日量 50 万バレル程度の減産影響が出ていたが、現在は閉鎖されていた油田の操業を再開している。また、IEA が、サウジアラビアとロシアの 6 月の産油量が前月比でそれぞれ同 43 万バレル、同 10 万バレル増加していたことを公表し、両国の増産姿勢が確認されたことも原油相場を下押ししたとみられる。

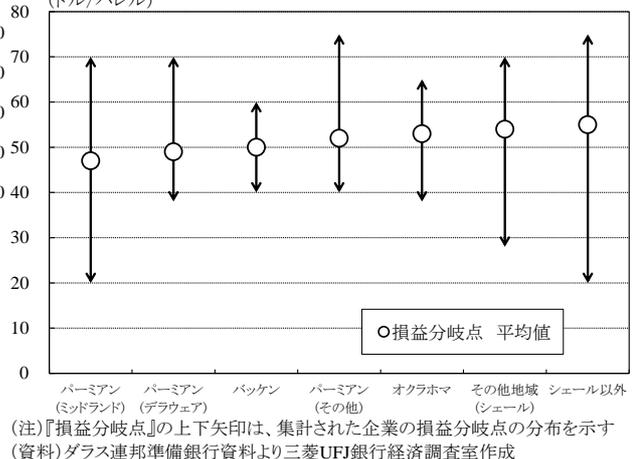
これらに加え、原油価格の上昇を抑える根底にあるのが米国シェールオイルである。2017 年 8 月以降、生産量は過去最高水準を更新し続けており、パーミアンをはじめ、その他の主要地域でも増産傾向にある。ダラス連邦準備銀行の調査では、シェールオイルの探査・生産企業の損益分岐点価格（WTI 期近物）は平均で 50 ドルとされる（第 2 図）。企業間で相当な幅があるが、価格が 70 ドルを越えると、ほぼ全ての企業で採算が取れるとみられる。すなわち、70 ドル近辺の原油価格では、シェールオイルの増産による需給緩和が価格の下押し圧力として大きく意識されることになる。パーミアンでパイプラインの輸送能力の限界が取り沙汰されているということはあるものの、足元で新たなパイプラインが建設中であり、そうした限界は一時的なものに止まる可能性が高い。

先行きの原油価格は、地政学リスクの動向等から一時的に高値に振れても長続きせず、2018 年は 70 ドル手前で推移した後、2019 年には需給緩和に伴って軟化すると考えられる。

第 1 図：米国シェール主要産地の産油量と原油価格の推移



第 2 図：米国の地域別の原油生産の損益分岐点価格



照会先：三菱 UFJ 銀行 経済調査室 伊勢 友理 yuri_ise@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。